

## 第2節 ボーデのピアノ曲の分析 ～内にある感覚を求めて～

新潟大学教育人間科学部 田中 幸治

### 第1項 はじめに

ここでは、ルドルフ・ボーデ作曲<リズム体操のためのピアノ音楽 Klaviermusik zur rhythmischen Gymnastik><sup>1)</sup>を取り上げて、音楽と動きの関係について考察したい。

リズム体操の実践の場では、音楽に動きを合わせるのか、動きに音楽を合わせるのか、この二つの相反する観点から選曲に悩むことが多いという指導者の声をよく聞く。音楽を優先させると動きの要素が限定されたり、目標とする動きを構成に組み込むことが困難になったり、逆に動きに音楽を合わせるには、その動きに合った新しい曲を作るしかないといった難しさに直面するようである。ボーデ自身はこの点について次のように述べている。「音楽は動きの伴奏であり、音楽に合わせて動けばいいというものではなく、むしろ、内にある感覚を呼び起こし、刺激し、解放することであり、このために身体的な表出が現われ、完全で、全体的で、リズムカルになる。」<sup>2)</sup>つまり「内にある感覚」は音楽と動きを結びつけるものであり、そこに焦点を当てていれば、音楽と動きが主従関係に陥ることなく、協調して高め合う関係になるということであろう。実際に「リズムカル・ムーブメントにおける音楽と動きの研究～音楽構成の理解と動きの変容との関係性～」<sup>3)</sup>の中で、音楽を理解することで動きそのものや動いたときの感覚に変化を感じたということが報告されている。

ルドルフ・ボーデ作曲の<リズム体操のためのピアノ音楽>は全 17 冊あり、1 冊に数曲ずつが収められている。1 曲ずつ動きに関するタイトルがついており、「歩く」「走る」「左右振」「はずむ」「揺れ動くようなリズム (ワルツ)」など様々だが、動きの課題がはっきりし、音楽を聞くと容易にそのタイトルの動きが目に見えようなものばかりである。そして音楽自体の構成もわかりやすくはっきりしている為、全体を把握し理解することも特別難しいことではない。また、80 歳の誕生日を記念して出版された 4 枚の小型版レコードでは、<リズム体操のためのピアノ音楽>からの選曲で、ボーデ自身のピアノ演奏を聞く事ができる。ドイツで指揮者としても活動していたことがあるボーデのピアノ演奏は、ひとことで言うと独特の味わいのある演奏という印象を受ける。華やかさや効果ばかりを狙ったのではなく、動きを感じさせ、音楽のもつ躍動感や構成によって「内にある感覚」に直接働きかけるようなものであると言えるだろう。これらのレコードにはボーデの考えた動きの構成も付けられており、そこには「ここにあげた動きの構成は、いろいろな行ない方の一例を示したものである。他の構成でも構わない。大切な事は、音楽と動きが緊密に関連つけられていることである。」<sup>4)</sup>と述べられている。

今回の分析では、ピアノ演奏の立場から音楽自体が要求する内容を深く探ることによって、音楽と動きと「内にある感覚」がどのように関係しあっているのかという点を明らかにしたい。

### 第2項 音楽と動き

今回は、<リズム体操のためのピアノ音楽>第7冊より、第1曲<歩く(整列して行進)Gehen(Aufmarsch)>について分析を行なう。この曲の楽譜を見ると「マーチのテンポで Im Marschtempo」と標記があり、音楽のテンポは題名のとおり、歩くために丁度良いテンポを要求されている。拍子は4分の4拍子で、行進曲でよく使用される2拍子ではない。これは単なる行進の伴奏ではなくリズム体操のためのピアノ音楽であることと、わざわざ曲頭にテンポの標示もあることから、特別なこととは感じられない。

#### 1. 音楽の構成と動きの構成

曲は 43 小節から出来ており、大きく 3 つに分かれている。1～18 小節 (第1部) と 19～36 小節 (第2部)、そして 37～43 小節 (コーダ) の曲の締めくくりと言ってよい部分である。第1部と第2部はほとんど同じ形であるが音域が少し高くなっている。第1部と第2部は、さらにそれぞれ2つの部分に分けられ

る。1つ目の部分は、4分音符で拍子をきざみクレッシェンドしていく1～10小節（1A）、19～28小節（2A）で、2つめの部分は、はずむような符点のリズムで2小節ずつ受け答えをしながら動きのある11～18小節（1B）、29～36小節（2B）である。コーダの部分は、符点のリズムの音型で、曲の中で一番強くなるフォルティッシモによって締めくくりに導いている。これらの曲の構造は演奏を聞いても、楽譜を見ても一目瞭然というくらいすぐに理解できることで、ボーデの提案している動きの構成も次のようになっていく。

隊形 整列して中央で2組に分かれる。

前奏 2小節（楽譜には書かれていない）

1～10小節 外側にいる人の指揮のもと、各組は揃って横方向に分列行進する。  
終わりに、前のほうに伸びた列をなおす。

11～12小節 前方に軽くとぶ。

13～14小節 後方に軽くとぶ。

15～18小節 11～14小節と同じ。

19～36小節 1～18小節と同じ。

37～43小節 退場する、またははじめての隊形にもどる。

## 2. 音楽とリズム体操をつなぐもの～内にある感覚～

音楽から考えた構成と、ボーデの提案する動きの構成は当然一致している。それは音楽とともにリズム体操を熟知したボーデが作曲し提案したものであるから何の不思議もない。ここで確認しておきたいことは、この構成を分かっているからといって、ボーデのいう「内にある感覚」を分かったことにはならないということである。拙著「ピアノで豊かな表現を」<sup>5)</sup>の中で筆者は、「ピアノは鍵盤を押さえれば簡単に音が出せてしまうため、学生によっては音楽と技術が分離してしまう場合がある。音だけを正確に鳴らして、音楽をしていると勘違いをしてしまうのだ。しかし、本人が『表現』したい内容に気付き、それを音にするというアプローチをし始めると、驚くほどピアノが表情豊かに語り始める。」という事を述べたが、「表現」したい内容に気付き、それを音にするというアプローチをし始めるときの原動力が、すなわちボーデの言うところの「内にある感覚」なのではないかと筆者は考える。つまり単なる「音の羅列」が「内にある感覚」によって真の「音楽」になるということである。「音の羅列」のみのピアノ演奏をリズム体操に置き換えて考えると、それは決められた振り付けに従って、ただ身体を動かすということであろう。そして真の「音楽」とは何かということをもリズム体操になぞらえて考えると、「内にある感覚」を呼び起こされた結果、または「内にある感覚」によって、表出される身体の、完全で、全体的でリズムカルな動きということであろう。では、このボーデの〈歩く（整列して行進）〉というピアノ曲では、何に注目して演奏したり、聴いたり、動いたりすればよいのであろうか？ピアノ演奏の立場から分析してみたい。

## 第3項 ピアノ曲の分析

### 1. 第1部の分析

第1部の1～10小節（1A）では両手で4分音符の和音を1小節に4つずつ弾いているだけであるが、変化していることは和音と、メゾ・フォルテからフォルテまでのクレッシェンドという強弱である。右手の和音は単音の「ド」にだんだんと高い方へ音が加わって変化しながら「ド、ミ♭、ラ」という和音（10小節目）にまで達する。左手は「ド」のオクターヴから始まり、だんだんと低いほうへ下がっていき「ファ」（10小節目）まで達する。両手同時に考えると、半音階の動きを含みながら1小節ずつ和音に変化し、クレッシェンドという強弱の変化と共に、緊張感を高めながら広がっていくという動きであることがわかる。これらの変化はすべて第1部の後半11～18小節（1B）のはじめのフォルテという頂点へ向かっている。最終的には10小節目の最後に右手に現われる32分音符の速い「ラシドレ」という動きと、左手の一步ずつ踏みしめて行くような下行の動きの末に、1Bの始まりで、両手とも「ミ」という音を頂点にして爆発しているかのようである。4分音符だけの単調なリズムの1Aから、1Bの符点のリズムを含んだ動きへの変化は、10小節を費やして準備しなければならないくらい劇的なものであったと言えよう。1Aは頂点への期待、緊張感、広がり、接近など、心臓がドキドキと脈打つような演奏が望まれると考える。

第1部後半の1Bでは、符点のリズムが中心となり動きが出てくるが、2小節ずつが問と答えのような対になり、それまでの興奮がだんだんと収まるように音が下がってくる。左手のリズムはそれまでと変わらない4分音符のリズムであるが、1拍目のバスの音と、跳躍して高い部分で動く2～4拍目の厚い和音が、強弱も含めて大きく揺れるようになっている。つまり各小節を支える1拍目のバスの動きは「ミ」「ミ」「ミ」「ラ」「ソ」「ラ」「ミ」「ラ」(11～18小節)という2小節ずつの揺れる動きとなり、それに続く和音も第11小節では「ミ、ラ、ド、ミ」「ファ、ラ、ド、ファ」「ミ、ラ、ド、ミ」というふうに、続く小節でも行ったり戻ったりするような強弱を伴った和音の動きになっている。右手の符点、左手の跳躍と和音の動きが2小節ずつの対で揺れながら、次の第2部へと向かっていくのである。

## 2. 第2部の分析

第2部は音の動きはほとんど第1部と同じであるが、音の高さが第1部よりも全体的に高くなっている。2Aは1Aより2度高くなり「ド」から「レ」に変化しており、2Bは1Bより3度高くなっている。これは第1部と第2部を全く同じ高さにして繰り返すという方向がはっきりしない並列の関係ではなく、第2部の音を高くすることによって、第1部の上に第2部が積み重ねられて、次の部分に向かっていることがはっきりするような協力関係になっている。2Aの右手の和音が1Aのものより厚みを増していることから、第1部より第2部のほうが緊張感の高まりがあり、2Bの爆発部分もより激しく感じられるようになっている。

コーダはそれまでの発展を受けてフォルティッシモという、曲中で一番強い強さとなり、リズムも符点を中心である。符点のリズムは言うまでもなく、躍動感、心の高まりを表すものである。第41小節には、この曲の中では新しいリズムである三連符が出現し、しかも一気に分散和音でオクターヴ以上も駆け上がって主和音を鳴らすという場面も出てくる。最後は曲の冒頭と同じ「ド」の音のユニゾンを両手で鳴らしているが、同じ音というだけで始まりの期待や緊張感のある音とは全く違い、開放感と自信に満ちたような音へと変化して全曲を締めくくっている。

## 3. まとめと考察

この曲を通して見ると、符点のリズムの部分、つまり1Bと2Bの部分を中心となっており、1Aと2Aの部分である4分音符の部分は、その後のための部分の準備や下地づくりとなっている。従って、ただ4分音符をきざむのではなく、次に来る部分へ向かって方向をはっきりさせながら進めていかなければいけない。そして最終的にはコーダの部分に全てが向かっているのである。これらのことから、この曲を演奏するときの「内にある感覚」は「前進」「発展」「成長」といったキーワードで表すことが出来るのではないだろうか。

このく歩く(整列して行進)という曲でリズム体操を実践するとき、ただ拍子に合わせて左右の足を動かすのではなく、どこかに向かっている「歩く」という動きでなければならないし、同じ「歩く」でも曲の始めと終わりでは歩き方が変化しているはずである。これは曲に動きを合わせなければいけないということを言っているのではなく、音楽によって「内にある感覚」が刺激され、その結果の身体の動きであれば、当然変化するであろうということを言っているのである。音楽が爆発に向かって緊張を高めているのに、ただ拍子に合った「歩く」という動きを実践するだけで動きに変化がないということは、「内にある感覚」に裏付けられた全体的でリズムカルな動きが出来ているとはいえないのではないだろうか。音楽に動きを合わせるか、動きに音楽を合わせるかが大切なのではなく、ボーデのいう「内にある感覚」に焦点を合わせ、音で表現したり、身体を動かしたりすることが重要なのである。

## 第4項 今後の方向

リズム体操を実践する現場では、「動きに合わない曲が用いられたり、子どもたちに人気のある曲が安易に使われたりすることがある。」<sup>6)</sup>とよく聞く。これは音楽と動きを表面的に結び付けようとしたり、音楽と動きをあまりにもかけ離れたものとして考えてしまったりする結果ではないかと思う。ボーデのピアノ曲は単純で魅力がなく、この曲でリズム体操をしてもあまり面白くないという意見もあるが、果たしてそうであろうか。今回の分析を通して、ボーデのいう「内にある感覚」に焦点を当てながらボーデのピアノ

ノ曲について音楽や動きを深く考えてみると、魅力的で個々の動きの基礎を確実に理解でき、選曲、動きの課題ももっと明らかになるのではないだろうか。また、音楽家にとっては音楽を聞いて「内にある感覚」を呼び起こされた結果の身体の動きがどのようなものであるのか、リズム体操によって音楽の流れを視覚的に捉えたり考察したりすることは、音の羅列ではない真の音楽の追求への一つの足がかりとなることは間違いないであろう。今後もボーデのピアノ曲の分析を続け、音楽と動きの関係について理解を深めていきたい。

【譜例】

Gehen(Aufmarsch)

Im Marschtempo

Rudolf Bode

【第1部】 〈1A〉

〈1B〉

【第2部】 〈2A〉

24

32

【コーダ】

36

注

- 1) Rudolf Bode (1956) Klaviermusik zur Rhythmischen Gymnastik. Im Selbstverlag, Bode-Schule Munchen.
- 2) 板垣了平 (1990) 「体操論」アイオーエム
- 3) 伊野義博・森下修次・田中幸治・滝澤かほる・坂下玲子・菅家礼子 (2004) 「リズムカル・ムーブメントにおける音楽と動きの研究～音楽構成の理解と動きの変容との関係性～」『新潟大学教育人間科学部紀要 第7巻第1号』 pp.85-97
- 4) Rudolf Bode (1961) Choreographien zu EP60021 . Schallplattenverlag Walter Koegler, Stuttgart.
- 5) 田中幸治 (2003) 「ピアノで豊かな表現を」(共著「音楽科教育の実践学～大学の研究と音楽授業をつなぐ～」三恵社 pp.69-87)
- 6) 前掲書3) pp.91